最側近の葛藤①

覚悟した政治家の責任

核溶融の残像

――福島原発事故10年

二〇一一年三月十一日午後二時四十六分、東京・永田町の衆院議員会館で突如、これまで経験したことのない激しく長い震動に襲われた。

内閣総辞職も一時懸念

「地下の会議室にいたが、相当揺れた。菅直人首相を補佐しなくてはならないと思い、すぐに首相官邸に向かった。その後、夕方になって原発がおかしいとの情報が入ってきた。地震、津波、原発事故の『三正面作戦』の始まりだった」

▽大きな判断

東日本大震災発生後、最初の記者会見を終えた菅と首相執務室で協議中だった午後五時四十二分、経済産業相の海江田万里が険しい形相で入ってきた。

「私が学生時代から親交があり、普段は穏やかな海江田さんがものすごい速足で飛び込んできた。そして即座に一五条事態の説明を首相にした」

全交流電源を喪失し、冷却機能に支障を来した東京電力福島第一原発から通報を受けていた海江田はこの時点で、原子力災害対策特別措置法一五条に基づく「原子力緊急事態宣言」の発令が必要と判断。菅の決断で史上初の宣言がすぐに出される段取りだった。だが菅と海江田、陪席の経産省幹部のやりとりは三十分近くに及び、細野には目の前の協議が袋小路に入っていくようにすら映った。

「危機感を覚えた。首相はすぐ細部に入る傾向がある。この時も『それはどういうことだ』と質問し、説明を受けて『それでどうなるんだ』と聞き返す。経産相が一五条事態と決めた以上、トップに求められるのは大きな判断だ。一刻も早く決断し、どう対応していくか次の議論に移るべきタイミングだった」

「ところが、首相は原発の現状把握に時間を費やし始めた。初動の判断の遅れは後々、極めて大きく響いてくる。以降、細部に入ろうとする首相を引き留めるのが私の仕事となり、大きな判断を下してもらう状況をいかにつくるかに心を砕いた」

結局、菅が緊急事態宣言を発令したのは午後七時三分。同六時台に既に予定されていた与野党党首会談があったとはいえ、海江田が官邸入りしてから八十分が過ぎていた。

「悩ましかった。自民、公明両党党首の『党派を超えて全面支援したい』との申し出を受けての党首会談だった。ただ会談のために首相の時間が二十分は取られてしまう。今思えば、野党党首には少し待ってもらい、宣言発令後に会談するのが良かったのかもしれない」

▽消えたおり

十一日深夜から十二日未明にかけ1号機が不安定化し始め、修羅場と化す現場では、原子炉を減圧するため蒸気を外部に放出するベントが検討された。

「東電からはベントのために『決死隊をつくっている』との説明が私にもあった。しかし私の心の中には、果たして民間人に決死隊を命じていいのかという葛藤があった。そこで官邸高官に『自衛隊で決死隊をつくれるか』と尋ねてみたが『不可能だ』と即答された。その理由として、現場の状況が分からず準備ができていない、また自衛隊はそもそも原発事故に関わる想定になっていないからだと説明を受けた」

「東電は第一隊がまず炉に近づき、次に第二隊、最後は第三隊と、ベントの作業手順を示していた。もし作業員が被ばくして重篤化すれば政治家として責任を取らなければならない。海江田さんとそんな話をしながら、自分の覚悟を決めた」

十二日の夜明け前、首相の第一原発視察の確定情報が官邸地下の危機管理センターに詰めていた細野の耳にも入ってきた。

「『段取りも整って間もなく行きます』との連絡で、反対できる局面ではなかった。二つのことを懸念した。まず首相の視察がベントを遅らせることにならないかとの心配。もう一つは、首相が現場で被ばくしたら国家運営上、大変なことになるという点だった」

菅は午前七時十一分に第一原発に到着。所長の吉田昌郎と協議し、ベントの即時実施を強く求めた。それでもベントの実施は午後にずれ込んだ。

「首相視察から一カ月後、私は初めて現場を訪れ吉田さんに会うが、どうしても聞いておくべきことがあった。それは、首相視察でベントが遅れたのか否か。本当に遅れて事態が深刻化したのなら、内閣総辞職ものだと恐れていた。幸い、吉田さんは『ベント作業は視察時にできていなかったので、首相が来て遅れたわけではない』と即座に答えた。自分の中におりのようにたまっていたものが、ようやく消えた」

× × ×

政府と地元、東電、事故現場、そして米国。その結節点として事故収束の矢面に立った首相最側近の証言を次回以降も続ける。（敬称略、共同通信編集委員・太田昌克）

不惑前

子曰（のたま）わく（中略）四十にして惑わず―。孔子の「論語」に刻まれた「不惑」の語源だ。

水素爆発が続発し、原子炉格納容器の爆発すら一時危ぶまれた東京電力福島第一原発事故が起きた10年前、首相補佐官だった細野豪志氏は39歳。不惑前の若年ながら、未曽有の国難に直面する日本の権力中枢のど真ん中にいた。

当時の首相、菅直人氏に見込まれての補佐官就任だったが、恐らく持ち前の知力と気力、体力が買われたのだと思う。

それでも、危機のかじ取りを担う一国の宰相に仕えるのみならず、理系出身のせいか事の細部にやたらこだわる首相の性癖をも織り込みながら事故収束に当たるのは、さぞかし至難の業であっただろう。

しかも首相官邸のみならず、関係各省庁や地元自治体、東電、そして米政府とプレーヤーは多岐にわたった。首相最側近の葛藤に目を凝らし、危機の教訓を抽出したい。

元首相補佐官 細野 豪志

ほその・ごうし　1971年京都府生まれ。京大卒。シンクタンク勤務を経て2000年に衆院選初当選。首相補佐官、原発事故担当相、環境相などを歴任し７期目。現在は無所属。

2011年３月12日朝、東京電力福島第一原発で、東電幹部らから説明を受ける当時の菅直人首相（左から２人目）＝内閣広報室提供

東京電力福島第一原発周辺市町村の首長らとの意見交換会で、あいさつする当時の菅直人首相。右は細野豪志氏＝2011年７月16日、福島県郡山市内のホテルで

原発事故を巡る経過

2011年3月11日

- 14時46分◆ 東日本大震災発生。東京電力福島第一原発で１～３号機が自動停止。この後、細野豪志首相補佐官は首相官邸へ
- 15:27◆ 津波第１波が到達
- 15:35◆ 津波第２波到達、その後１～５号機で全交流電源喪失
- 16:55◆ 菅直人首相が震災後初の記者会見
- 17:42◆ 海江田万里経済産業相が菅首相、細野補佐官らと「原子力緊急事態宣言」を巡り協議
- 18:12◆ 与野党党首会談
- 19:03◆ 菅首相が原子力緊急事態宣言を発令
- 深夜～◆ １号機が不安定化

12日

- 未明◆ 菅首相の第一原発への視察訪問が決定
- 7:11◆ 菅首相が第一原発に到着。その後、吉田昌郎所長と協議
- 14:30◆ 東電が１号機のベント成功を確認
- 15:36◆ １号機原子炉建屋が水素爆発

※肩書は当時

ベント　原発事故で原子炉格納容器の圧力が高まった際、容器の破損などを防ぐため減圧して放射性物質を含んだ蒸気を外部に放出する措置。東京電力福島第一原発事故の前は、同原発のような沸騰水型で設備の設置が進んだが、加圧水型の原発には必要ないとされていた。第一原発事故でベントが国内で初めて行われた。その後、事故対策が強化され、新たな規制基準の下では、沸騰水型・加圧水型の双方で「フィルター付きベント」の設置が義務付けられるようになった。